

「沖縄の歴史情報研究」への感想

審査委員 佐々木 隆爾

1 このプロジェクトは長い陣痛を経て生まれた

重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」プロジェクトでは審査委員を仰せつかり、一昨年に続き昨年12月13～14日の総括班研究会に出席させていただきました。これで4年間にわたった重点研究に一応の区切りがついたわけであり、よろこばしい限りである。

歴史資料の電子情報化がかなり自覚的に追求されるようになってからほぼ10年経つ。この間に全文データベース化や画像処理など、さまざまな技法が開発されて成果を挙げるようになり、これをさらに高次元化するためのイニシアティブが求められるようになって来た。1990年、日歴協や学術会議歴史学研究連絡委員会で「歴史情報資源研究センター」構想についての議論が始まったが、その中で語られた夢の一つは、遠隔地において研究環境や得手・関心の異なる人々がプロジェクトチームを組み、それぞれの強みを生かして特定のテーマに関する資料群を集中的に収集し、広く利用できるようにすることであった。数年前に岩崎宏之さんから文部省科研費重点領域に「沖縄の歴史情報研究」をテーマとして応募したいという腹案を聞かされた時、この夢にあえて挑戦する岩崎さんの勇気と先見性にまず敬意を表したが、他方で科研費などを運用した経験から、果たしてこの難事業が統御できるのだろうかという浅からぬ危惧を感じたものである。重点領域研究ともなれば、研究費総額が数億円にのぼるわけであり、実際にはその金額をかなりの数のプロジェクトチームに分け、それぞれが停滞せず、予定された成果を挙げるよう監督しなければならない。これには企画力も必要だが、それにも増して組織能力が要求される。とりわけ歴史研究者という個性の強い人々を一つの目的に向かって誘導するのは至難のわざではないだろうか。

この研究プロジェクトが採択され、私は研究費配分審査委員の一人に加えていただいた。この審査委員会の役割は、岩崎さんを中心とする研究総括班の準備した企画研究と、応募者が自主的に作成した公募研究の二つの分野にわたる研究計画書を審査して採否を判定することにあつた。研究計画書を審査する際に必要なカンは、すでに科研費配分一段審査委員を何回か務めていたので自然と身につけていた。その要点は、テーマに独創性があり、かつ研究費が配分されればすぐに計画が動き出せるところまで煮詰められているかどうかにある。この審査委員会は毎年一回開かれ、前年度に採択した研究班が予定通り走っているかどうかをしらべてかなり厳しい評価を加え、次年度の研究費配分の際に加減することになっていた。この厳しさが研究費の稼働率を高め、研究がやつつけ仕事に流れるのを防ぐ役割を果たしたと思う。しかし、審査委員会がこのような役割をはたすことができたのは、研究総括班が各研究班の状況をつねに的確に把握しており、審査委員を納得させるだけの情報を提供し続

けてくれた結果である。この審査の結果、成果を期待されながら中断の止むなきにいたった研究班も出たし、効率不十分で縮小をお願いしたものもある。当該研究班の皆さんには相当に不愉快なことであったと思うが、なにとぞお許してください。

2 歴史資料の集積・提供に新時代が開かれつつある

部分的にはこのような問題も見られはしたが、基本的には各研究班がよく走り、沖縄を中心とする東アジア世界の歴史資料の集積・整理・提供のあり方を全く新しい段階に押し上げた。これはもう否定しようのない事実である。この結果、各々の研究者がインターネットの使用法に習熟していれば、よく校訂された基本資料が必要に応じて入手できるという時代がもたらされた。今のところ利用可能な資料はある範囲に限られているようであるが、資料の収集や処理の方法・手順が把握されマニュアル化された今となっては、研究領域や範囲の拡大はそれほどの難事ではなくなった。今後新しいデータベースが追加されて行けば、数年のうちに利用できる資料の範囲は急速に広がるであろうし、同一文書の読み下しと画像とが同時に見られるといった資料表示の高次元化も図られるであろう。

こうしたシステムが構築されたことの歴史的意味は大変大きいと思う。第一に、このプロジェクトは歴史資料の包括的な電子情報化に軌道を敷く役割を果たした。第二に、沖縄関連の歴史資料がどこに住む人にもアクセス可能となったことにより、この分野の歴史研究につきまとったある種の制約が取り除かれ、より多くの人々が研究に参加できるようになった。また第三に、それは沖縄史のことさらな聖域化・美化の傾向を克服し、世界史の中に位置づけるという研究姿勢を一般化させるに違いない。

3 心の交流の歴史にも光を当てるべきではないか

このプロジェクトで取り上げられなかったテーマに、音楽の歴史情報化の問題がある。われわれは画像情報までは歴史情報として処理する方法をマスターした。次の挑戦目標として音楽の歴史情報化を選ぶべきではなからうか。周知の通り三味線は中国で開発された楽器であるが、これが沖縄に伝わって三線となり、さらに本土に伝わっておもに猫皮を張った和三味線となった。この他にも、琵琶・笛・太鼓など多様な楽器が輸出入されたし、蛇皮や太鼓の皮などの原料も少なからず中国から入った。このような楽器とともに、メロディー・歌詞・音色・リズムなどがアジア諸地域と沖縄・本土の間で交流され、それぞれの地域の住民の生活感情や音楽的感性の定着と変容に決定的な役割を果たして来た。この種の問題はもっぱら音楽家・演奏家によって研究されて来たが、歴史学もまたこの問題を正面から受け止める必要があると思う。民謡はそれが作られた場所と時期の社会集団の心の記録である。とくに「阿里屋ユンタ」の原曲のような長い叙事詩には、地域を守り育てようとする住民の意欲や、美しい娘を現地妻にする派遣役人への痛罵などが彫り込まれ、行政文書では得られない住民感情の記録となっている。幕末から明治期にかけて、本土では明清楽とくに月琴音楽が大流行したが、この中で中国の「中山流水」が「金比羅船々」のメロディーとなり、大流行した。沖縄にもこれに類する事例がありそうであり、地域住民間の心の交流の深さを推測させるのである。